

自閉症スペクトラム障害の子どもをもつ母親の
育児におけるポジティブ感情
—「嬉しい実のなる木」の制作を通して—

橋本浩美・一門恵子

Positive feeling of autistic childrens' mothers in their caring experiences
using "happy fruit tree task"

Hiromi HASHIMOTO・Keiko ICHIKADO

応用障害心理学研究 第15・16合併号 別刷

2017年3月

Japanese Journal of Applied Psychology, Education and Welfare for Disorders

No. 15・16 March 2017

自閉症スペクトラム障害の子どもをもつ母親の 育児におけるポジティブ感情

—「嬉しい実のなる木」の制作を通して—

橋本浩美¹⁾・一門恵子

Positive feeling of autistic childrens' mothers in their caring experiences
using "happy fruit tree task"

Hiromi HASHIMOTO・Keiko ICHIKADO

本研究は、自閉症スペクトラム障害のある子どもの母親を対象として、育児の過程での嬉しかった事項、すなわちポジティブ感情の把握を目的とした。ASD 児の母親69名、父親14名を対象として「嬉しい実のなる木」の制作を依頼した。定型発達児の母親13名については記述式アンケートを実施した。その結果、母親群では、「嬉しかった事項」の内容は、身辺自立を中心とした「自立」「対人関係の改善」「スキルの向上」などのカテゴリーに収約された。中でも重度児の母親では、「排泄の自立」に喜びを感じていた。父親群では、甘える等の「親への愛着」が報告された。制作課題をとおして、「成長の再確認ができた」「癒された」などの心理療法的効果も確認された。子どもの「自立」の促進が支援の優先的課題であることが示唆された。

キーワード: 自閉症スペクトラム障害, 母親, 育児の喜び, ポジティブ感情

I 問題と目的

自閉症スペクトラム障害は、認知・感覚・行動などの側面の多様で重篤な障害の様相を呈する。そのため家族の心身の負担は極めて重く持続的である。従来、自閉症スペクトラム障害児・者の家族支援に関する研究は、家族のストレスや負担感に関するものや、それらの軽減や養育の向上を目的とした取組に関するものが多く報告されてきた。柳澤（2012）は、多様で重篤な症状を呈する自閉症スペクトラム障害児・者の家族に共通する特徴的な問題として、障害特性への理解と対応の難しさ、社会からの障害に対する理解の難しさを挙げている。ストレス研究の中には、自閉症児をもつ親が、自閉症以外の障害児をもつ親に比べてストレスが高いという報告もある（Hastings & Johnson, 2001）。夏堀（2001）は、自閉症児の母親とダウン症児の母親とを比較して、また、山根

（2010）は、高機能自閉症やアスペルガー障害等の高機能広汎性発達障害の子どもをもつ母親を対象に、障害受容過程で障害認識の混乱や葛藤を繰り返し体験することを示唆している。渡邊・伊藤・宋（2006）は、高機能広汎性発達障害の子どもをもつ母親の入園・就学前のストレスを定型発達児の母親のストレス構造と比較して、高機能広汎性発達障害児群は不安や負担感が高いとともに期待感も高く、不安定な心理状態にあると述べている。

このように、従来の研究は家族のストレスや負担感等のネガティブな側面に注目して、それを軽減するための研究や実践が多くを占めており、ポジティブ感情に注目する研究や実践は少ない。三隅・清水・本田（1991）は、「子どもの障害をめぐる親の認識を正確に捉えつつ、親の精神面を支えるような親援助プログラムを用意する必要がある」と主張している。本研究では、「子どもの障害をめぐる親の認識」におけるポジティブ感情として捉えられる、母親が「育児の過程で嬉しかったことは何か」を明らかにすることで、子どもが

¹⁾ 八代市立第三中学校講師，2014年度九州ルーテル学院大学大学院人文学研究科修了

そのような姿に成長できるように、また、そのような場面や状況を増やすことによって、子ども自身と母親支援の目的を見出すことができると考えた。

Ⅱ 方法

1. 調査対象者

・主にA大学が主催している自閉症スペクトラム障害児を対象とした療育活動に参加している幼児～高卒者の母親70名と父親14名で、母親群では、記述式アンケート調査のみの回答で、制作課題が提出されなかった1名を除いた69名を分析の対象とした。

・定型発達児の母親13名は、A大学女性職員ならびに社会人の本学大学院学生である。

2. 調査の場所と期間

主にA大学教室、2013年11月～2014年7月

3. 手続き

(1)「嬉しい実のなる木」制作課題

療育活動中の親の集団カウンセリングの時間帯で、15～20分間実施した。親たちに画用紙（白、B4サイズ）とクレヨン（緑色と茶色の2色）、リンゴの実の形の用紙（ピンク色、直径5cm程度）



図1-1 「嬉しい実のなる木」の例

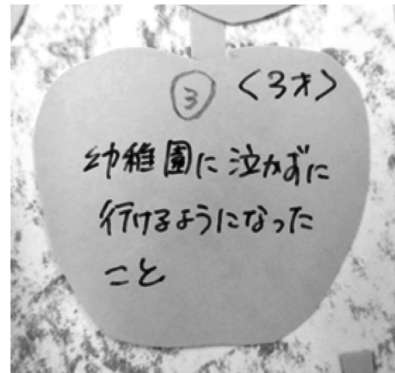


図1-2 「嬉しい実」の例

を配布し、「この画用紙に一本の木を描いてください」「これまで、お子さんのことで嬉しかったことはどんなことですか。いつ頃の、どんなことを簡単にピンクの実に書いて、木の絵に自由に貼ってください」と教示した。

定型発達児の母親には、記述式アンケート調査を行った。A4用紙1枚に、年齢期に分けて、子育ての過程での喜び（嬉しかった事項）について記入を求めた。

(2) フェイスシート

①子どもの年齢、性別、療育手帳の有無、所属教育機関、家族構成

②「嬉しい実のなる木」課題作成後の感想

4. 分析方法

母親群、父親群、定型発達児の母親群の育児における「嬉しかった事項」（ポジティブ感情）について質的分析を試みた。

Ⅲ 結果

1. 子どもの年齢と療育手帳の有無及び障害の程度

子どもの年齢段階を表1に、療育手帳の種別を表2に示した。

小学生の子どもをもつ母親が30名（43.5%）と最も多く、次いで高校生の母親12名（17.4%）、中学生の母親12名（17.4%）、成人9名（13.0%）、幼児の母親が6名（8.7%）となっている。子どもの療育手帳の有無や障害の程度の内訳を表2に示した。療育手帳をもつ子どもは51名おり、全体

表1 子どもの年齢段階別の母親の人数

子どもの年齢段階	母親の人数(割合)
幼児	6(8.7%)
小学生	30(43.5%)
中学生	12(17.4%)
高校生	12(17.4%)
高卒者	9(13.0%)
合計	69(100.0%)

表2 子どもの療育手帳の有無

障害の種類	人数(割合)
A 1	8(11.6%)
A 2	17(24.6%)
B 1	7(10.1%)
B 2	19(27.5%)
なし	18(26.1%)
合計	69(100.0%)

の73.9%を占める。最も多いのは、B2で19名(27.5%)、次いでA2(24.6%)、A1(11.6%)、B1(10.1%)であった。

2. 母親群の「嬉しかった事項」の内容について

(1)「嬉しかった事項」の内訳

「嬉しい実のなる木」構成課題では69名の母親から回答が得られた。

「嬉しかった事項」として書かれた項目内容は合計973件で、母親一人あたりの平均は14.1件であった。それらをカテゴリー分類した結果を表3に示した。

嬉しかった事項の内容から「手伝いをする」「言葉の獲得」「集団生活・集団活動へ参加」「親への愛着」など、30のサブカテゴリーが抽出された。最も件数が多かった内容は、「親への愛着」で86件、次いで「集団生活・集団活動への参加」85件、「場面に応じた会話や感情表現」65件、「運動・スポーツへの興味・関心や上達」60件、「手伝いをする」53件、「友達との関わり」52件と続いている。さらに、これらは、「身辺自立」(189件, 19.4%)、「コミュニケーションの自立」(104件, 10.7%)、「社会参加」(176件, 18.1%)、「愛着」(130件, 13.4%)、「情緒の安定」(17件, 1.7%)、「友だち関係の拡大」(52件, 5.3%)、「子どもの興味・関心

や上達」(186件, 19.1%)、「誕生の喜び」(28件, 2.9%)「よい性格」(19件, 2.0%)「健康」(39件, 4.0%)、「その他」(33件, 3.4%)の10のカテゴリーに収束された。最終的には「自立」「対人関係の改善」「向上」「その他」の4つの大カテゴリーに収束され、「自立」に関するものが469件と最も多く、全体の48.2%を占め、「対人関係の改善」に関するものが199件(20.5%)、「向上」に関するものが186件(19.1%)であった。

(2) 母親群の「嬉しかった事項」の子どもの年齢段階別比較

サブカテゴリーごとの内容を、幼児期、学童期、中高生期、高卒後と年齢段階別に分けて比較したものを表4に示した。

年齢段階別の総数を見ると、学童期の内容が421件(43.3%)と最も多く、次いで幼児期の内容が336件(34.5%)、中高生期の内容が129件(13.3%)、卒業後の内容が33件(3.4%)、時期が未記入のものが54件(5.5%)であった。

項目別に見ると、幼児期において報告件数が多かったのは、「言葉の獲得」(35件)、「誕生の喜び」(28件)、「親への愛着」(27件)、「集団生活・集団活動への参加」(22件)であった。学童期に多い件数は「集団生活・集団活動への参加」(47件)、「親への愛着」(43件)、「友だちとの関わり」(34件)、「運動・スポーツへの興味・関心や上達」(30件)、「手伝いをする」(30件)、「場面に応じた会話や感情表現」(29件)などであった。中高生期では「場面に応じた会話や感情表現」(16件)、「親への愛着」(14件)等が多く報告された。

(3) 父親群の「嬉しかった事項」の内容について

「嬉しい実のなる木」構成課題では14人の父親から回答が得られた。父親の「嬉しかった事項」は合計158件、父親一人平均11.3件で、母親(14.1件)と比較すると少ない。父親の「嬉しかった事項」をカテゴリー分類した結果を表5に示した。

最も件数が多かった内容は、「親への愛着」で41件、次いで「運動・スポーツへの興味・関心や上達」で15件、「集団生活・集団活動への参加」で11件、「作ること(絵、図工、料理等)への興味・関心や上達」で10件と続いている。

表3 嬉しかった事項の内訳（母親群）

大カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	件数（割合）		
自立	身辺自立	手伝いをする	53	189(19.4)	469(48.2)
		食事の自立・偏食の減少	36		
		排泄の自立・トイレで排泄	31		
		首のすわり～立つこと・歩くことの発達	21		
		着替えや片付けの自立	19		
		留守番をする	12		
		入浴の自立	8		
		その他の生活習慣の自立	9		
	コミュニケーションの自立	言葉の獲得	39	104(10.7)	
		場面に応じた会話や感情表現	65		
	社会参加	集団生活・集団活動への参加	85	176(18.1)	
		学校・園・職場等に通う	45		
		ライフステージを無事通過	23		
		一緒に外出する	16		
		買い物に行く	7		
対人関係の改善	愛着	親への愛着	86	130(13.4)	199(20.5)
		兄弟姉妹への愛着	29		
		家族の一体感	15		
	情緒の安定	パニックや癇癪の減少	17	17(1.7)	
	友だち関係の拡大	友だちとの関わり	52	52(5.3)	
向上	子どもの興味・関心の拡大やスキルの上達	運動・スポーツへの興味・関心や上達	60	186(19.1)	186(19.1)
		学習への興味・関心や上達	45		
		作ること（絵、図工、料理等）への興味・関心や上達	35		
		音楽への興味・関心や上達	21		
		その他の子どもの興味・関心や上達	25		
その他	誕生の喜び	誕生の喜び	28	28(2.9)	119(12.2)
	よい性格	子どもの優しさや思いやり、頑張り	19	19(2.0)	
	健康	子どもの健康、体力の向上	24	39(4.0)	
		子どもの笑顔	15		
	その他	サポートや療育への感謝、その他	33	33(3.4)	
合 計			973	973(100.0)	973(100.0)

(N = 69)

表4 嬉しかった事項の年齢段階別比較（母親群）

大カテゴリー	サブカテゴリー	合計	幼児期	学童期	中高生期	高卒後	未記入
			件数 (割合)	件数 (割合)	件数 (割合)	件数 (割合)	件数 (割合)
自立	手伝いをする	53	6(11.3)	30(56.6)	13(24.5)	2(3.8)	2(3.8)
	偏食の減少、食事の自立	36	15(41.7)	9(25.0)	5(13.9)	3(8.3)	4(11.1)
	トイレで排泄、排泄の自立	31	16(51.6)	6(19.4)	2(6.5)	0(0.0)	7(22.6)
	首のすわり～立つこと、歩くこと等	21	17(81.0)	1(4.8)	0(0.0)	0(0.0)	3(14.3)
	着替え、片付けの上達・自立	19	9(47.4)	7(36.8)	1(5.3)	0(0.0)	2(10.5)
	留守番をする	12	0(0.0)	6(50.0)	3(25.0)	0(0.0)	3(25.0)
	入浴の上達・自立	8	2(25.0)	5(62.5)	1(12.5)	0(0.0)	0(0.0)
	その他の生活習慣	9	5(55.6)	3(33.3)	1(11.1)	0(0.0)	0(0.0)
	言葉の獲得	39	35(89.7)	3(7.7)	0(0.0)	0(0.0)	1(2.6)
	場面に応じた会話や感情表現	65	15(23.1)	29(44.6)	16(24.6)	2(3.1)	3(4.6)
	集団生活・集団活動への参加	85	22(25.9)	47(56.5)	12(12.9)	3(3.5)	1(1.2)
	学校・園・職場に通う	45	9(20.0)	21(46.7)	12(26.7)	3(6.7)	0(0.0)
	ライフステージを無事通過	23	3(13.0)	10(43.5)	5(21.7)	5(21.7)	0(0.0)
	一緒に外出する	16	3(18.8)	4(25.0)	6(37.5)	2(12.5)	1(6.3)
	買い物に行く	7	0(0.0)	5(71.4)	1(14.3)	1(14.3)	0(0.0)
対人関係 の改善	親への愛着	86	27(31.4)	43(50.0)	14(16.3)	1(1.2)	1(1.2)
	兄弟姉妹への愛着	29	8(27.6)	19(65.5)	1(3.4)	0(0.0)	1(3.4)
	家族との一体感	15	6(40.0)	7(46.7)	1(6.7)	1(6.7)	0(0.0)
	パニックや癇癪の減少	17	5(29.4)	9(52.9)	2(11.8)	0(0.0)	1(5.9)
	友だちとの関わり	52	15(28.8)	34(65.4)	1(1.9)	1(1.9)	1(1.9)
向上	運動・スポーツの上達	60	16(26.7)	30(50.0)	8(13.3)	2(3.3)	4(6.7)
	学習の上達	45	14(31.1)	21(46.7)	4(8.9)	1(2.2)	5(11.1)
	作ることへの興味・関心や上達	35	7(20.0)	20(57.1)	6(17.1)	0(0.0)	2(5.7)
	音楽への興味・関心や上達	21	4(19.0)	13(61.9)	0(0.0)	0(0.0)	4(19.0)
	その他の興味・関心や上達	25	10(40.0)	10(40.0)	3(12.0)	2(8.0)	0(0.0)
その他	誕生の喜び	28	28(100.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	子どもの優しさや思いやり、頑張り	19	6(31.6)	9(47.4)	4(21.1)	0(0.0)	0(0.0)
	子どもの健康、体力の向上	24	15(62.5)	6(25.0)	2(8.3)	0(0.0)	1(4.2)
	子どもの笑顔	15	7(46.7)	4(26.7)	2(13.3)	0(0.0)	2(13.3)
	その他（理解者との出会い、サポートなど）	33	11(33.3)	10(30.3)	3(9.1)	4(12.1)	5(15.2)
合 計		973	336(34.5)	421(43.3)	129(13.3)	33(3.4)	54(5.5)

(N = 69)

表5 嬉しかった事項の内訳（父親群）

大カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	件数（割合）		
自立	身辺自立	手伝いをする	2	16(10.1)	43(27.2)
		食事の自立・偏食の減少	3		
		排泄の自立・トイレで排泄	3		
		首のすわり～立つこと・歩くことの発達	6		
		着替えや片付けの自立	0		
		留守番をする	1		
		入浴の自立	1		
		その他生活習慣の自立	0		
	コミュニケーションの自立	言葉の獲得	3	3(1.9)	
		場面に応じた会話や感情表現	0		
	社会参加	集団生活・集団活動への参加	11	24(15.2)	
		学校・園・職場等に通う	4		
		ライフステージを無事通過	5		
		一緒に外出する	3		
		買い物に行く	1		
対人関係の改善	愛着	親への愛着	41	50(31.6)	59(37.3)
		兄弟姉妹への愛着	5		
		家族の一体感	4		
	情緒の安定	パニックや癇癪の減少	4	4(2.5)	
	友だち関係の拡大	友だちとの関わり	5	5(3.2)	
向上	子どもの興味・関心の拡大やスキルの上達	運動・スポーツへの興味・関心や上達	15	31(19.6)	31(19.6)
		学習への興味・関心や上達	2		
		作ること（絵、図工、料理等）への興味・関心や上達	10		
		音楽への興味・関心や上達	2		
		その他 子どもの興味・関心や上達	2		
その他	誕生の喜び	誕生の喜び	6	6(3.8)	25(15.8)
	よい性格	子どもの優しさや思いやり，頑張り	0	0(0.0)	
	健康	子どもの健康，体力の向上	6	13(8.2)	
		子どもの笑顔	7		
	その他	サポートや療育への感謝，その他	6	6(3.8)	
合 計			158	158(100.0)	158(100.0)

(N=14)

さらにカテゴリー別では、「愛着」が50件(31.6%)と最も多く、次いで「子どもの興味・関心の拡大やスキルの上達」が31件(19.6%)、「社会参加」が24件(15.2%)、「身辺自立」が16件(10.1%)であった。大カテゴリー別では、「対人関係の改善」が59件(37.3%)で最も多く、次いで「自立」が43件(27.2%)、「向上」が31件(19.6%)であった。

(4) 定型発達児の母親群の「嬉しかった事項」について

定型発達児の母親13名からも子育ての過程で「嬉しかった事項」についての回答が得られた。「嬉しかった事項」は合計95件で、これらをカテゴリー分類したものを表6に示した。

最も件数が多かった内容は、「友だちとの関わり」

表6 嬉しかった事項の内訳（定型発達児の母親群）

大カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	件数（割合）		
自立	身辺自立	手伝いをする	5	10(10.5)	39(41.1)
		食事の自立・偏食の減少	3		
		排泄の自立・トイレで排泄	0		
		首のすわり～立つこと・歩くことの発達	1		
		着替えや片付けの自立	1		
		留守番をする	0		
		入浴の自立	0		
		その他生活習慣の自立	0		
	コミュニケーションの自立	言葉の獲得	0	7(7.4)	
		場面に応じた会話や感情表現	7		
	社会参加	集団生活・集団活動への参加	10	22(23.2)	
		学校・園・職場等に通う	4		
		ライフステージを無事通過	5		
		一緒に外出する	3		
		買い物に行く	0		
対人関係の改善	愛着	親への愛着	9	13(13.7)	26(27.4)
		兄弟姉妹への愛着	2		
		家族の一体感	2		
	情緒の安定	パニックや癇癪の減少	0	0(0.0)	
	友だち関係の拡大	友だちとの関わり	13	13(13.7)	
向上	子どもの興味・関心の拡大やスキルの上達	運動・スポーツへの興味・関心や上達	2	13(13.7)	13(13.7)
		学習への興味・関心や上達	2		
		作ること（絵、図工、料理等）への興味・関心や上達	0		
		音楽への興味・関心や上達	5		
		その他 子どもの興味・関心や上達	4		
その他	誕生の喜び	誕生の喜び	1	1(1.1)	17(17.9)
	よい性格	子どもの優しさや思いやり、頑張り	5	5(5.3)	
	健康	子どもの健康、体力の向上	3	4(4.2)	
		子どもの笑顔	1		
	その他	サポートや療育への感謝、その他	7	7(7.4)	
合 計			95	95(100.0)	95(100.0)

(N=13)

で13件、次いで「集団生活・集団活動への参加」で10件、「親への愛着」9件と続いている。さらにカテゴリー別に見ると、「社会参加」が22件、「愛着」「友だち関係の拡大」「子どもの興味・関心の拡大やスキルの上達」がそれぞれ13件であった。大カテゴリー別では、「自立」が39件で最も多く、次いで「対人関係の改善」が26件であった。

3. 重度群と軽度群の2群間の比較

子どもの障害の軽度・重度2群間における母親の「嬉しかった事項」について比較した。

母親69人を重度群（A1、A2、B1の療育手帳をもつ子どもの母親32人）と軽度群（B2の療育手帳をもつ子どもと療育手帳なしの子どもの母親37人）の2群に分け、各サブカテゴリー別に「嬉

しかった事項」として挙げた母親の人数と割合、並びに差の有無について表7に示した。重度群と軽度群の割合について χ^2 検定を行った。

「一緒に外出する」では1%水準で、「言葉の獲得」「作ることへの興味・関心や上達」「子どもの興味・関心や上達」「その他の生活習慣」では5

%水準で重度群の方が有意に多く、「トイレでの排泄、排泄の自立」と「パニックや癇癪の減少」間では有意傾向が認められた。「友達との関わり」では1%水準で、「子どもの優しさや思いやり、頑張り」では5%水準で軽度群の方が有意に多かった。

表7 母親群における重度群と軽度群の比較

項 目	全体 N = 69	重度群 (%) n = 32		軽度群 (%) n = 37	有意差
集団生活・活動への参加	42	18 (56.3)		24 (64.9)	
場面に応じた会話や感情表現	39	16 (50.0)		23 (62.2)	
親への愛着	38	17 (53.1)		21 (56.8)	
友だちと仲良くする	37	11 (34.4)	<	26 (70.3)	**
保育園・幼稚園、学校、職場に行ける	37	15 (46.9)		22 (59.5)	
運動・スポーツへの興味・関心や上達	36	17 (53.1)		19 (51.4)	
偏食の減少、食事の自立	31	17 (53.1)		14 (37.8)	
学習への興味・関心や上達	31	16 (50.0)		15 (40.5)	
言葉の獲得	30	18 (56.3)	>	12 (32.4)	*
手伝いをする	28	14 (43.8)		14 (37.8)	
トイレで排泄、排泄の自立	26	16 (50.0)	>	10 (27.0)	+
誕生の喜び	22	9 (28.1)		13 (35.1)	
兄弟姉妹への愛着	21	8 (25.0)		13 (35.1)	
作ることへの興味・関心や上達	21	14 (43.8)	>	7 (18.9)	*
その他（理解者との出会い、サポートなど）	21	10 (31.3)		11 (29.7)	
音楽への興味・関心や上達	18	10 (31.3)		8 (21.6)	
その他の子どもの興味・関心や上達	18	12 (37.5)	>	6 (16.2)	*
子どもの健康、体力の向上	17	6 (18.8)		11 (29.7)	
首のすわり～歩くこと等	15	7 (21.9)		8 (21.6)	
ライフステージを無事通過	15	7 (21.9)		8 (21.6)	
着替えや片付けの自立	14	9 (28.1)		5 (13.5)	
家族への愛着	14	6 (18.8)		8 (21.6)	
一緒に外出する	14	11 (34.4)	>	3 (8.1)	**
子どもの優しさや思いやり	14	3 (9.4)	<	11 (29.7)	*
パニックやかんしゃく、多動などの減少	13	9 (28.1)	>	4 (10.8)	+
子どもの笑顔	12	4 (12.5)		8 (21.6)	
留守番ができる	11	4 (12.5)		7 (18.9)	
その他の生活習慣	9	7 (21.9)	>	2 (5.4)	*
入浴の自立	8	3 (9.4)		5 (13.5)	
買い物に行く	7	2 (6.3)		5 (13.5)	

(** p < .01, * p < .05, + < .10)

表8 感想文の分析（ポジティブ感情）

カテゴリー 人数（割合）	サブカテゴリー	例
成長の再確認31（45.6%）	成長を実感した	子どもの成長のひとつひとつが思い出されてよかった。いろいろとできるようになったなあと感じた。
	つらい中にも嬉しさがあつたことに気付いた	困ったことばかり考えていたが、いいところがたくさんあつたと実感した。辛かったことならいくらでも書けると思っていたが、嬉しかったことが多くて驚いた。
	当たり前のことが嬉しいことに気付いた	当たり前のことでも嬉しかったと思ひ出す。小さいことでも嬉しく思えることがたくさんあつたなと思えた。
癒し効果28（41.2%）	振り返るよい機会になった	振り返ることができてよかった。思い出すよい機会になった。
	楽しかった	工作をしているようで楽しくできた。嬉しいことに集中できるのが嬉しかった。
	これからも嬉しいことを増やしたい	これからも子どもと一緒に乗り越えていきたい。これからも嬉しいことを増やせるように頑張る。
	またやってみたい	時々振り返ってみたい。家でも子ども自身にさせてみたい。
謝意 7（10.3%）	ありがとうございます	貴重な体験をさせていただきありがとうございます。
感動 4（5.9%）	こんなにたくさんの成長があつた	嬉しかったことが多くて驚いた。うれしかったことがたくさん思い出され涙が出た。

(N=70)

表9 感想文の分析（ネガティブ感情）

カテゴリー 人数（割合）	サブカテゴリー	例
想起困難13（19.1%）	思い出せなかった	なかなか思い出せなかった。すぐに思い出せなくて、子どもに申し訳なく思った。
悲喜交々 3（4.4%）	悲しいことも思い出した	嬉しかったこと以上に辛さのほうが多くを占めている。喜びの裏には悲しみがあつたことも思い出した。

(N=16)

4. 調査方法が親に与える心理的効果（「実のなる木」課題作成後の感想文の分析）

68人の母親から得られた「嬉しい実のなる木」構成課題作成後の感想文の中からポジティブな内容を抽出しカテゴリー分類した結果を表8に示した。母親のポジティブな思いは4つに分類された。「成長の再確認」ができたと感じた母親は31人（45.6%）、「癒し効果」があつたと感じた母親は28人（41.2%）、「謝意」を感じた母親は7人（10.5%）、「感動」した母親4人（5.9%）であった。

同様に、68人の母親から得られた「嬉しい実のなる木」構成課題作成後の感想文の中からネガ

ティブな思いを抽出しカテゴリー分類した結果を表9に示した。

母親のネガティブな思いは2つに分類され、「想起困難」と感じた母親は13人（19.1%）、「悲喜交々」と感じた母親は3人（4.4%）であった。

Ⅳ 考 察

本研究の目的は、子どもとの関わりの中で母親が嬉しかった事項を明らかにし、子どもの障害をめぐる親の認識におけるポジティブ感情について検討することであった。

1. 母親の子育てにおける「嬉しかった事項」について

①母親群全体の「嬉しかった事項」の特徴

母親の育児における「嬉しかった事項」は、「自立」「対人関係の改善」「向上」の3つの大カテゴリーに分類された。

「自立」はこれら4つの大カテゴリーの中で最も件数が多く、「嬉しかった事項」全体の5割近くを占めている。「自立」はさらに「身辺自立」「コミュニケーションの自立」「社会参加」のカテゴリーに分類された。

「身辺自立」は、食事や排せつ、歩行、入浴、着替えなど、人が生きていく上で最も基本的なことであり、日常生活の中で育児の中心的担い手である母親にとっては最も身近な事柄である。自閉症スペクトラム障害児の場合、母親はその障害特性を理解し対応することに困難やストレスを感じており（柳澤，2012；山根，2013），そのような中で子どもが身辺の基本的なことができるようになることは母親にとっての喜びに繋がったと考えられる。

「コミュニケーションの自立」は、発語や言語理解といった「言葉の獲得」から、身ぶりなどの非言語を含む対人的コミュニケーションである「場面に応じた会話や感情表現」の内容であり、人とつながり社会生活を送るためには重要な事柄と言える。「場面に応じた会話や感情表現」の内容には、返事や挨拶といった基本的なものから、「学校、園、友達のことを話す」や「自分の考えや気持ちを話す」「電話をする」といった、より高度な内容など様々な内容が挙げられており、コミュニケーションに関する母親の関心が広範囲に及んでいることが伺える。母親にとってこれらの課題が改善されていくことが喜びに繋がっていくと考えられる。また、アイコンタクトや身振り、顔の表情などの非言語的コミュニケーションの障害特性に関しても、「顔を見て話せる」や「(写真撮影時の)ピースサイン」などが「嬉しかった事項」として挙げられている。

「社会参加」のカテゴリーでは、「集団生活・集団活動への参加」に関する内容が最も多く、「嬉しかった事項」全体の中でも「親への愛着」に次ぐ件数であった。同じ「社会参加」の中の「学校・

園・職場に通う」や「ライフステージを無事通過」と併せると、その大半が学校や幼稚園・保育園に関わる内容であった。この関心の高さは、学校などの集団の中で子どもがうまくやっていけるかという不安の裏返しでもあろう。瀧・中村(2014)は、保護者のストレスとサポートの相関で負担感と学校のサポートの間に有意な相関があること、サポート源としても学校（学級担任、校長や教頭、保健室の先生など）のサポート率が低いことを挙げ、学校側と保護者側に考え方のズレある場合は学校自体が保護者のストレスになることを指摘している。また、山根（2013）は親のストレスの4因子の一つに、「将来・自立への不安」を挙げている。これは子どもの将来や自立の難しさに対する不安に関わるストレスで、発達障害児の親は定型発達児の親とは異なり、子どもの将来や進路について見通しを持つのが難しいため、就学や進学、就職などの際に不安を抱くということである。このように、自閉症スペクトラム障害児の親にとって、学校や幼稚園・保育園は子どもの「自立」に欠かせない重要な集団生活の場なのである。母親がここで挙げた「嬉しかった事項」は、子どもが学校・園での行事（運動会や発表会、卒業式・入学式など）に参加し、頑張ったり、中には代表挨拶などの役割を果たす等の、子どもの生き生きとした姿や集団の中で他児と共に行動している様子である。また、「学校・園・職場等に通う」は文字通り「集団生活・集団活動への参加」につながるものであり、そうやって「ライフステージを無事通過」し、自立していくことが親の願いであると考えられる。

「対人関係の改善」は199件で「嬉しかったこと」全体の約20%を占めている。この「対人関係の改善」は「愛着」「情緒の安定」「友だち関係」の3つのカテゴリーに分かれる。「愛着」は家族間の愛着に関するものを抽出した。特に「親への愛着」の件数が86件と「嬉しかった事項」全体でも最も多かった。内容として「言葉をかけてくれる」「手紙やプレゼントをくれる」「甘える、(母親を見て)喜ぶ」などが挙げられた。「親への愛着」が特に多く挙げられた理由には、自閉症スペクトラム障害の障害特性である「相互の対人的-情緒的関係の欠落」(DSM-5)が関わっていると考えられる。

そのような中で、言葉をかけられたり、手紙をくれたり、甘えたりと、母親に関心を持ち情緒的な関係を持つとする子どもの態度に、母親は喜びを感じていると考えられる。

「友だち関係」では、幼稚園・保育園や学校、近所の子どもたちとの関わりに関する内容で、「嬉しかった事項」全体の6.6%を占めた。DSM-5では自閉症スペクトラム障害の障害特性として「人間関係を発展させ、維持し、それを理解することの欠陥」が示されている。仲間に対する興味の欠如や、または「さまざまな状況にあった行動に調整することの困難さ」で遊びを通して、友だちを作ることの困難さがある。そのような中で、わが子に友だちができたり、一緒に遊んでいる姿を見たり、友だちの話をしたりすることは、子どもが少なくとも仲間に対して興味を持ち、人間関係を形成できていることが母親に顕著な喜びともたらしめていると考えられる。

「向上」では、子どもが運動・スポーツや学習、音楽などへの興味・関心の拡大や、練習する中でスキルが上達しているという内容で、「嬉しかった事項」全体の19.1%を占めている。学力の向上や技術の上達など、できなかったことができるようになることが嬉しいこととして挙げられている。

②母親群の「嬉しかった事項」の子どもの年齢段階別の比較

年齢段階別の総数で幼児期と学童期の割合が高かったのは、今回の調査対象者の約半数が幼児と小学生の母親（それぞれ8.6%、42.9%）であったことが考えられる。

年齢段階別に最も多く挙げられた事項を見ると、幼児期には食事や排泄、歩行、着替えなどの「身辺自立」や「コミュニケーションの自立」の初期段階である「言葉の獲得」が挙げられ、幼児期の母親にとってはこれらが最大の関心事であり、育児における不安感を反映するものと考えられる。

学童期には、「場面に応じて会話や感情表現」が増加し、コミュニケーションが拡大していること、学校という集団生活や友だち関係の形成が母親の喜びとなり、また、スイミングクラブや塾などに参加することで、学習や運動、音楽、創作ス

キルなどの「向上」に関する内容が多いのも学童期の特徴である。子どもの社会との接点が増えることで越えなければならないハードルも増えるが、子どもの可能性の発見も増え、喜びが多い時期とも言える。

一方「愛着」という観点から見ても、親、兄弟姉妹、家族への愛着に関する件数が学童期で最も多く挙げられた。「親への愛着」に関しては、学童期に43件と半数を占めるが、幼児期にも27件報告されており、幼児期から学童期にかけて多いと言える。坂口・別府（2007）は、就学前の自閉症児は愛着形成の困難さという特徴をもつために母親はストレスを感じていることが多いことを指摘している。幼児期から学童期にかけて、「親への愛着」に関して母親が嬉しいと感じている内容が多いということは、子どもが幼児期から学童期への成長していく中で、母親への愛着行動が増えていると考えることもできる。山上（1999）は、愛着関係の形成は発達の原動力であり、幼児期において愛着関係がしっかり育つような心理的配慮が重要であると指摘し、いかに母子関係や他者関係の深まりを援助するかという視点が重要な課題であると述べている。幼児期の自閉症スペクトラム障害児には愛着形成成立の困難さがあることを認識し、母親と子どもの双方を支援することが求められている。

③父親群の「嬉しかった事項」との比較

母親群と父親群共に、最も件数が多かった項目は「親への愛着」であったが、「自立」における3つのカテゴリーである「身辺自立」「コミュニケーションの自立」「社会参加」の全てにおいて母親群より割合が低かった。特に母親群の内容では件数が上位であった「場面に応じた会話や感情表現」の内容は父親群では0件であった。ストレスという観点から自閉症スペクトラム障害児・者の父親と母親との違いを見ると、母親は睡眠や食事といった日常的な適応行動に関わる問題に対して強いストレスを感じる傾向があり、一方父親は子どもの痾癪といった外在化する行動に強いストレスを感じる傾向がある（Davis & Carter, 2008）との報告もある。今回の調査では、「パニックや痾癪の減少」が嬉しさに繋がった内容の割合に父

親群と母親の群で差は認められなかったが、「自立」、特に「身辺自立」と「コミュニケーションの自立」といった日常的な適応行動に関わる問題に対して父親はストレスを感じる傾向になく、それゆえ喜びも少ないと考えられる。このことは、母親が子どもの適応行動に関わる問題に対するストレスや負担感を日常的に感じていることを最も身近な存在である父親に理解されていないという可能性が示唆される。

④定型発達児の母親群の「嬉しかった事項」との比較

定型発達児の母親13名からアンケート用紙による回答が得られた。「嬉しい実のなる木」制作課題ではないので、単純な比較はできないが、最も大きな違いは、定型発達児の母親では、カテゴリー別での「社会参加」や「友だち関係の拡大」の割合が高く、「身辺自立」や「コミュニケーションの自立」の割合が低かったことであった。

⑤母親群の重度群・軽度群での比較

母親69人を子どもの障害程度で重度群と軽度群に分け、子どもの障害の程度と母親の「嬉しかった事項」の内容との関連を調べた。

「言葉の獲得」は重度群の半数以上の母親が挙げており、軽度群より有意に多く報告された。自閉症スペクトラム障害は言語発達における質的な障害を伴うことが多い。若林・西村(1988)は、話し言葉の音形を獲得できていない水準を「話しことばをもたない群」と定義して、様々な文献から自閉症児の46%が話し言葉をもたないと推測している。さらに、自閉症児の言語獲得の障害は、単に言葉を発することができないというだけでなく、言葉を理解したり考えたりすることの障害にまで広がった言語の欠陥であると述べている。本研究でも、「ママ」や事物の名称などの有意味語を発することだけでなく、歌に反応したり、言葉の意味が理解できたり、指差しをしたということに喜びを感じた母親が多くいた。これらは、言語獲得の前段階であり、他者を認知する能力の発達とも関わっている(若林・西村, 1988)。言葉の獲得が母親にとって大きな喜びであるのは、やっと出現した子どもの音声言語に、母親を認知し母

親と何かを共有しようとしていることに対してであり、「ママ」という発語は母親を認知したという意味でも象徴的な言葉だと言えよう。

「トイレで排泄」「排泄の自立」は重度群の半数の母親が挙げており、軽度群に対して傾向差が見られた。排泄は身辺自立の中でも、育児の負担に関わる重要な課題で、重度群の排泄の自立に至るまでの困難さが窺える。

「その他の生活習慣」の内容は、「服薬」や「リボン結び」「ランドセルの開閉」「蛇口を閉める」ことなどであった。このような項目を挙げた母親9名中、7名が重度群の母親であり、軽度群より有意に割合が高かった。生活の中での、些細な出来事かもしれないが、昨日までできなかったことが「やっとできるようになった」という母親の感動が窺える。

「作ることへの興味・関心や上達」と「子どもの興味・関心や上達」は軽度群より5%水準で有意に割合が高かった。「作ることへの興味・関心や上達」の内容は主に図画・工作や裁縫、料理の領域で、重度群では特に絵を描くこと、折り紙、料理を挙げている母親が多かった。また、「その他子どもの興味・関心や上達」の内容には、囲碁やそろばん、畑仕事の上達、事物(シャボン玉、写真、もちつき、虫など)への興味や特定の能力などが挙げられ、重度群では特に事物への興味に関する内容が多かった。これらは障害特性である「限定され固執した関心」に関連し、母親は子どもの興味の拡大を喜んだり、あるいは「限定され固執した関心」をむしろ好意的に受け止めたりしているのではないかと考えられる。

「一緒に外出する」は「パニックや痙攣の減少」とも関係し、重度群の母親の方が「一緒に外出する」は1%水準で多く、「パニックや痙攣の減少」は傾向差が見られた項目である。「パニックや痙攣の減少」の内容としては、「痙攣泣き」や「自傷」「こだわりの減少」などが挙げられた。柳沢(2012)は、自閉症スペクトラム障害児・者の家族が抱える問題の一つに、障害特性への理解と対応の難しさを挙げている。母親にとって、痙攣や自傷といった行動面の問題がなぜ起こるのかを理解することや、そのような行動への対応が極めて困難と推測される。また、「一緒に外出する」の内容としては、

コンサートや映画、飛行機の利用、散髪など、様々な場所に一緒に出かけ、その場所で長時間過ごすことができる、などが挙げられた。

これらは障害特性である「変化に対する抵抗」や「柔軟性に欠ける思考様式」「感覚刺激に対する過敏さ」などが関わっており、特に障害が重度であれば、公共の場への外出の際は親にとって大きな負担となり得る。柳澤（2012）は、自閉症スペクトラム障害児・者の家族が抱えるもう一つの問題点として、社会からの障害への理解を得ることの難しさを挙げている。そのため痼癢や自傷行動などの問題行動の生起を家族が恐れて公共の場に自閉症スペクトラム児・者を連れて行くのを避けるようになり、また本人の社会活動も制約され、地域からの孤立に繋がるというのである（Lee et al., 2008）。パニックやこだわりが減少し、安心して外出できることは母親にとっては大きな喜びであらうし、切実な願いでもあろう。

軽度群では「友だちとの関わり」を挙げた母親は70%以上おり、重度群より危険率1%水準で多かった。この他、割合が高く軽度群の上位を占めた項目は、「集団生活・集団活動への参加」「相手を意識した自己表現」「親への愛着」「保育園・幼稚園、学校、職場に通う」と、「親への愛着」以外は社会生活に関する事項であった。軽度群の母親は、子どもの障害特性ゆえに社会生活に適応できるかどうかに関心を持っており、その中でも友だちという同年齢の対人関係を築けることを重視していると考えられる。

2. 「嬉しい実のなる木」の制作課題が親に与えた心理的效果について

今回の「嬉しい実のなる木」構成課題においては、子どもの成長を再確認することができたと感じた母親が半数近くいた。また、「やってよかった」「楽しかった」と癒しを感じた母親も4割を超えている。一方で「思い出せなかった」と感じた母親や、悲しさ・辛さを思い出した母親も少数ではあるがいた。

ネガティブな思いをもつ母親もいたが、ポジティブな思いをもつ母親が大半を占め、このような制作課題には心理療法的効果があり、母親の精神的な面での支援にも有効ではないかと思われる。

まとめ

本研究は、自閉症スペクトラム障害児および母親を支援することを念頭に置き、育児の過程で母親が嬉しかった事項を明らかにして、子どもの障害をめぐる親の認識におけるポジティブ感情について検討することを目的とした。

「嬉しい実のなる木」の制作課題の結果からは、自閉症スペクトラム障害をもつ子どもの母親が、日常生活の中で子どもの様々な成長に喜びを感じており、特に子どもの自立（「身辺自立」「コミュニケーションの自立」「社会参加」）に大きな関心を持っていることが明らかとなった。その一方で、子どもから親への愛着に関する内容も多く、障害特性である「相互の対人的・情緒的関係の欠落」（DSM-5）面での改善が親にとっての喜びとなったものと考えられた。

子どもの障害の程度や年齢段階と「嬉しかった事項」との関連については、「社会参加」において、重度群では、子どもが自分で自分のことができ「身辺自立」「言葉の獲得」「集団に適応」が重視されているが、軽度群では、「集団適応」と共に、「友だち関係の形成」も重視されている。また、重度群では「パニックや痼癢等の減少」によって、子どもと一緒に外出できる範囲の拡大や、外出時間の増加も母親の喜びとなっていた。

母親群の「嬉しかった事項」の背景には自閉症スペクトラム障害の障害特性に起因する苦悩が存在することも推測された。自閉症スペクトラム障害児者とその母親たちを支援するには、そのことを認識し、障害特性を理解して母親の悩みや喜びに寄り添っていくことが重要であることが示唆された。今回は樹木画のモデルを提供したために、バウムテストのような分析には適さないデータであった。しかし今後はバウムテストに準ずる形態での描画の実施も考えられる。

付記：本論文は、橋本浩美の九州ルーテル学院大学2014年度修士論文の一部に加筆修正したものである。

文 献

アメリカ精神医学会編 / 日本精神神経学会 高橋三郎・大野裕監訳（2014）DSM-5 精神疾患

の診断・統計マニュアル, 医学書院.

(受稿: 2月12日, 受理: 10月22日)

- Davis, N. O. & Carter, A. S. (2008) Parenting stress in mothers and fathers of toddlers with autism spectrum disorders: Associations with child characteristics, *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 38, 1278-1291.
- Hastings, R. P. & Johnson, E. (2001) Stress in UK families conducting intensive home-based behavioral intervention for their young child with autism, *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 31, 327-336.
- Lee, L.C., Harrington, R. A., Louie, B. B., & Newschaffer, C. J. (2008) Children with autism: Quality of life and parental concerns, *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 38, 1147-1160.
- 三隅輝見子・清水康夫・本田秀夫(1991) 発達障害児の早期療育における親援助プログラムの開発ー通園療育期に入った場合の障害をめぐる親の認識ー, 安田生命社会事業団研究助成論文集, 27 (1), 79-89.
- 夏堀 撰 (2001) 就学前期における自閉症児の母親の障害受容過程, 特殊教育学研究, 39 (3), 11-21.
- 坂口美幸・別府哲 (2007) 就学前の自閉症児をもつ母親のストレスの構造, 特殊教育学研究, 45 (3), 127-135.
- 瀧水城・中村真理 (2014) 発達障害児を養育する保護者のストレスと自己成長感ーソーシャルサポートとの関連ー, 東京成徳大学臨床心理学研究, 14, 1-6.
- 若林慎一郎・西村辨作 (1988) 自閉症児の言語治療, 岩崎学術出版社.
- 渡邊裕子・伊藤良子・宋慧珍 (2006) 高機能広汎性発達障害の子どもをもつ親の入園・就学前のストレスに関する研究, 発達障害研究, 28 (1), 72-85.
- 柳澤亜希子 (2012) 自閉症スペクトラム障害児・者の家族が抱える問題と支援の方向性, 特殊教育学研究, 50 (4), 403-411.
- 山上雅子 (1999) 自閉症児の初期発達ー発達臨床的理解と援助ー, ミネルヴァ書房.
- 山根隆宏 (2010) 高機能広汎性発達障害児をもつ母親の障害認識の困難さ, 神戸大学大学院人間発達環境学科研究科研究紀要, 4 (1), 151-159.
- 山根隆宏 (2013) 発達障害児・者をもつ親のストレス尺度の作成と信頼性・妥当性の検討, 心理学研究, 83 (6), 556-565.

Positive feeling of autistic childrens' mothers in their caring experiences using "happy fruit tree task"

Hiromi HASHIMOTO・Keiko ICHIKADO

The propose of this study is to investigate positive feeling of autistic childrens' mothers in their caring experiences. Seventy mothers of ASD children, 14 fathers and 13 mothers of TDC were administered the "happy fruit tree task" (drawing a tree and placing pieces of fruit shape paper with happy episodes of their children). Mothers of ASD children reported such categories as "self-help", "better personal relationship" and "skill-up". For mothers of severe level children "learning toilet skill" was the happiest episode. "Attachment" was reported as happy episode of the fathers' group. Mothers of Typical Developing Children felt happy for their children's "Socialization". Most mothers reported that they could recognized development of their ASD children. It was suggested that we should support ASD children to develop their self-help skills.

Key words: ASD, mothers, positive feeling, happy episodes of ASD children